

雪、天からの手紙、

北国の冬はアラレが激しく屋根を打つ音で始まる。冷たい時雨（ひぐれ）模様の天気が続いた後、ミヅレ混じりの初雪が降る。にわか雪にアラレが混じり、何度か本格的な雪が降っては消えまたつもり、いつの間にか根雪の季節となってしまう。

アラレは雪雲から雪のつぶてのようになり落ちてあつという間に真っ白に積る。雲の中で雪片や過冷却の雲粒が無数にくつけて、雪だるまのように太っておちてくる。その後から雪がひらひらと舞い流れるよう落ちてくる。

降る雪を手袋でそつと受けてみると、幸運なときには小さな結晶を散りばめた六本の腕を伸ばした美しい雪の華の結晶を見ることができる。顕微鏡で見れば円い視野のなかに、六角形の氷の板や水晶のような6角柱、針のような細い結晶、鼓（づみ）の形などの、千変万化一姿を変えた雪の華のモザイクが浮かんでくる。

六葉のも時には二本の腕を出し、まれには一八本の腕を持つていて雪の結晶を見つけることができる。雪雲の中のドラマがいろいろな結晶の形となつて落ちてくるのである。

雪の魅力は、巧妙な造作と、その言葉の響

きが良いことである。三十年も昔だが南極昭和基地に越冬したおりに「ユキ」という言葉に大変に厄介になつた。

今でこそ赤道上空の通信衛星経由で、日本と南極が国際電話やメールで結ばれているが、当時は銚子無線局とのトンツーによる電報が唯一の通信の手段だつた。越冬中の一年の間はもちろん手紙の配達はない。カタ仮名の電報が日本の家族と南極を結ぶ唯一の糸であつた。字数で電報料金が決まるので、せいぜい二、三十字で最大限でも五十時。短いカナ文のなかにいかに多くの言葉を伝えられるかに腐心した。

そのこで、日本を出発する前にアメとか行きとか短い言葉の組み合わせで通じる十幾つかのカタカナ暗号表を作つた。その中で「ユキ」は最も多く使われた言葉の一つであつた。

雪は天から送られた手紙である。そしてその手紙の文句は結晶の形、模様という暗号でかかれていて、「ユキ」は白い大陸南極と日本を結んだ便りの暗号言葉のひとつだつた。